

Valincour の批評における視点と基準

—*Lettres à la Marquise*** sur le sujet de* la Princesse de Clèves について—(1)

萩原茂久

Valincour と *Lettres à la* *Marquise*** sur le sujet de* la Princesse de Clèves

1920年代は十七世紀の作家ラ・ファイエット夫人 (Marie-Madeleine Pioche de La Vergne, Comtesse de La Fayette) の伝記的・作品的研究の、眩惑的ともいえる最盛期であったが、その主要作品『クレーヴの奥方』(*La Princesse de Clèves*) にかかわって、その時期にヴァランクール (Jean-Baptiste Henri du Trousset, Sieur de Valincour) の名が登場したのは、いろいろな意味で十七世紀当時の読者たちの関心を最大にひいた個所——「告白」の場が、ヴィルディウ夫人 (Marie-Catherine-Hortense Desjardins, Madame Antoine Boesset de Villedieu) の1675年に発表された小説『愛の混乱』(*Les Désordres de l'Amour*) の一場面から借りているとの指摘を、ヴァランクールがおこなった⁽¹⁾からにはほかならない。それは全部で370ページに及ぶ批評書『「クレーヴの奥方」の主題についての某侯爵夫人への手紙』(*Lettres à la Marquise*** sur le sujet de la Princesse de Clèves*⁽²⁾) のなかにあった。『クレーヴの奥方』の作品価値に対して多大の先入観を抱く1920年代の研究者たちには、その指摘はとうてい無視できないものだったろうが、主としてそのことだけでヴァランクールを取りあげるのは、残りのすべてにおいてこの批評家を葬り去るのとひとしい、といっても言いすぎではない。

職業としての文芸批評家が成立する十九世紀に対して、足かけ二世紀も早い十七世紀に、あるひとつの小説作品についてまとまった批評書が刊行されたことじたい、驚くべきことであった。もちろんそれはティボォデ (Thibaudet) 流にして分類すれば⁽³⁾、「教養人士の批評」(critique des honnêtes gens)、「談話批評」(critique parlée⁽⁴⁾) のカテゴリーにはいるものだったろう。近・現代批評にくらべれば素朴で稚拙な面があるのは否定できなからう。しかし二十五歳になったばかりの新進気鋭の博学

者・教養人士が、「緻密で」「洞察力のこもった」、そして「皮肉な⁽⁵⁾」考察をおこなったこの書簡体の批評書は、当時の知的なサロンにおける公約数的意見の巧妙な反映であると同時に、繊細・微妙な個性的才知をとおしてのフィード・バックでもあることは否定できないのだ。

ヴァランクールが古典主義世代の感情と流儀に精通していたのは、単にその時代を生きた存在だったからというだけでなく、文字どおりの「教養人士」(l'honnête homme) だったからであり、すなわち言いかえれば、「学問・芸術の素養がゆたか」であると同時に、「処世術をよく心えた⁽⁶⁾」人士だからであった。この批評書そのものが、三年後に刊行された『ギュイズ公爵フランソワ・ドゥ・ロレーヌの生涯』(*La Vie de François de Lorraine duc de Guise*⁽⁷⁾) とともに、ヴァランクールがよい友に出会い、よい地位を手にする主要な原因となったのは実に意義ぶかい。初期的な文学の成功をより深く永続的な文学への研さんのきっかけとはせず、むしろ実社会での地歩確立の手形としたのであるから。

国王の庶子トゥルーズ伯爵 (Comte de Toulouse) の館に職をえ、半世紀ものあいだ家庭教師・友人・秘書・相談役としてこの貴族と結ばれることになり、マラガの海戦では提督となった伯爵を補佐して、イギリス・オランダ連合艦隊を打ち破るという功名を成しとげるまでに至るが、伯爵の母親モンテスパン夫人 (Madame de Montespan) に相談を受けたラシーヌ (Jean Racine) の推せんがなかったなら、ヴァランクールのこの栄光ある人生はなかったろうし、また、彼にこの批評書がなかったなら、ラシーヌの推せんはなかったろう⁽⁸⁾。

いっぽう、彼にきわめて同情的な推定をくたせば、その文学的才能に関して控え目な態度をとるほかなかったのは、自身の才能の限界を正確に了解していたからだったのかもしれない⁽⁹⁾。しかしながら、けっきょく1699年にボワロォ (Nicolas Boleau-Despréaux) の推せんにより、アカデミィ・フランセーズ会員となり (ラシーヌの死去による空席を満たす)、国王の歴史編さん官にも任ぜられた⁽¹⁰⁾ ことにより、文学者としては最高の栄誉と地位とをヴァランクールは手になることになる。『クレヴの奥方』に対する批評書の社会に与えた効果と、それをいっそう効果的なものにした著者の世俗的手腕とが、改めて痛感されるのだ。

さて、1653年に生まれ、1730年に死去したヴァランクールが、1678年二十五歳のときに出版した『「クレヴの奥方」の主題についての某侯爵夫人への手紙』には、著者の名が印刷されてはいなかった。それはちょうど、同じ年に刊行された『クレヴの奥方』じたいが、作者名をはぶいて世に現われたのと似ていた。1662年から

1669年にかけて発表された小説の60パーセント以上が、署名なしか、意味不明のイニシアルをつけていたという記述⁽¹¹⁾を信ずれば、つぎの十年間に急速にその傾向が衰えたとは考えられず、上述の二冊の、一方は小説、他方は批評であるが、文学書がいずれも無署名であるのを見ても、そういう現象が個別の政治的配慮あるいは興行的配慮を理由とする以上に、もっと気がるな流行現象にすぎなかったのかもしれないという推定もできる。しかし発表された文学作品の質がよく、社会の評判を呼べば呼ぶほど、無署名ないし匿名であることは、結果的に興行的成功に相乗的効果を及ぼすことはいうまでもない。

『クレーヴの奥方』は1678年1月16日国王の出版認可を受け、同年3月8日の(第一回目の)印刷完了⁽¹²⁾をもって世に現われたが、4月13日づけと推定されるラ・ファイエット夫人の、サヴォワ宮廷秘書官レシュレーヌ(Chevalier de Lescheraine)への返事⁽¹³⁾のなかで、彼女はこの作品は自分が書いたものではないと、いわゆる作者否認をおこなっている。この場合は、十五年まえ、つまり1662年発行の『モンパンシエ公爵夫人』(*La Princesse de Montpensier*)がすでに彼女の作品であることが知られていたせいもあり、また作品執筆のうわさが事前に流れていたから、レシュレーヌが指摘するのはかなり当然のことともいえた。しかし全くの新人であるヴァランクルールの場合は、著者当てのゲームは少しちがった渦を描いた。『クレーヴの奥方』の主題についての某侯爵夫人への手紙⁽¹⁴⁾(以後は『……手紙』と略す)は、1678年6月17日国王による出版特許権の認可を受け、同月30日にパリ印刷業・書籍業組合帳簿への登録⁽¹⁴⁾がなされているが、後者の事項は印刷が完了したから登録されたのか、それとも出版認可がおりたから記帳されたのか、私にははっきりしない。しかし『クレーヴの奥方』の場合、認可から印刷完了まで五十日を要した例によって考えると、それは6月17日から7月末日くらいのあいだに世人の目に触れるようになったであろうと考えて、大きな誤りはあるまい。

このようにして世に出た『……手紙』は少なくとも数カ月は、ブール神父(Père Bouhours)によって書かれたものだと、一般には信じられていた。コルビネリ(Corbinelli)がビュッシイ＝ラビュタン(Bussy-Rabutin)に9月18日にあてた手紙には、「あなたの『クレーヴの奥方』についての考察を拝見しました。……ブール神父が同作品にした批評については、なんといわれますか⁽¹⁵⁾」と書かれているが、同じ日セヴィニエ夫人(Madame de Sévigné)がビュッシイ＝ラビュタンにあてた手紙、それに対するビュッシイの返事(9月27日)、さらにそれに対するセヴィニエ夫人の手紙(10月12日⁽¹⁶⁾)などは、すべてブールを『……手紙』の著者と決めつ

けていた。

この批評書の評判は上昇して行ったが、その途上において、著者と決めつけられたブール神父の否認がおこなわれ、これだけの成功を博した作品の若い著者が、しかも名のり出ていささかも支障がない以上、いつまでも沈黙したままでいるはずはなかった。とはいえ、『……手紙』の真の著者が世のひとびとに知られた時期は正確にいつか、ということになると確定するのは困難である。しかしヴァランクールが『クレヴの奥方』に対する批評書と、1681年にあらわしたギュイズ公爵についての歴史書との業績によって、上述したようにラシーヌの推せんでトゥルーズ伯爵の教育係りに就任したのは、伯爵がまだ四歳だったという説⁽¹⁷⁾を信ずれば、それは1682年ということになる。また、ヴァランクールの批評に対して、その翌年の1679年にラ・ファイエット夫人側から、シャルヌ (Abbé de Charnes) が書いたとされる反論書が出版された。『「クレヴの奥方」の批評についての会話』 (*Conversations sur la critique de la Princesse de Clèves*)⁽¹⁸⁾ がそれであるが、これは1679年2月4日印刷が完了しているにもかかわらず、国王の出版認可はそれよりおそく、5月1日づけとなっている⁽¹⁹⁾。この反論書が世人の手にとられ、ヴァランクールによる反論の反論が期待された時期は1679年のなかばから後半以降にかけてであったということができるので、『……手紙』のほんとうの著者が明らかになったのは、早ければこの年の前半、おそければ翌年の1680年中であったと推定しても、大きな誤りはあるまいと思われる。

***Lettres*…の構成における三分割と視点の分裂**

さて、以上のような著者と作品との、からまり合う軌跡図の呈示のあとでは、とうぜんその批評作品じたいの特色と意義とが検討されなければならない。まず『……手紙』において私たちの注意をひくのは、全体が三分割されている構成のしかた（第一から第三の手紙まで）であろう。手紙の名あて人に対してある種の順序をもって説明するのに、小説作品『クレヴの奥方』での「三つの事項」を考慮して、「行為一般」および「あらゆる事件を仕組む手法」、「主要登場人物たちに付与される感情」、そして最後に「作家の文体および使用される叙述法」となっている⁽²⁰⁾が、『「クレヴの奥方」の批評についての会話』の方はこの構成に照応して、「第二の会話——行為について」「第三の会話——感情について」「第四の会話——言語について、および文体について⁽²¹⁾」と簡略化された章題名を採用している。つまり『……手紙』の著者の

意図は、「行為（事件）」「感情（心理）」「文体（用語）」の三つに全体を分けることによって、順序ないし段階を明確化しながら、論を展開することにあつたのだ。

しかし実際に、その意図は文字どおり達成されただろうか？ ロォガー（Maurice Laugaa）でなくても⁽²²⁾、これら三部分（三つの手紙）のあいだの同一性・交換可能性には容易に気づく。三部分に配置したことについてこの研究者は、当時の修辞学あるいは伝統的な修辞学の方法を部分的に採用したのだらうと推論する⁽²³⁾が、それぞれの部分をくわしく検討したあとでなければ、この批評書の構成の意味と意義とは軽がるしく結論づけることはできまい。

視点については、単一で固定したものにはほど遠く、数個の視点から成り立っているというほかはない。そして、「対話批評」「座談会的批評」「サロン批評」という形をもって一見外界が投影されているかのようでありながら、真実は自我を分散して辛らつな批評の調子をやわらげ、第三者的な公平のヴェールをかぶることによって、どちらの意見に組するグループからも非難の集中を浴びないようにしている。数個の視点はけっきょく、ヴァランクールそのひとによる単一の視点に帰着することはいうまでもないが、集団批評の仮面をつけた個人批評のこの巧妙な手法は、十七世紀の産物としては驚きの対象にじゅうぶん成りうるものではなからうか？

ヴァランクールは『クレヴの奥方』の本を手に入れたとき、「むさぼるように」、しかし「できる限りの注意を払って⁽²⁴⁾」、その作品を読むのである。その結果、すばらしく見事な内容に出会うことによって、それが総体的に感嘆すべき作品と思われることを、名あて人に認める。が、すぐれた文学作品は一度読むだけでは満足できないからという理由で、再読しなければならない。そうしたすえに、「私は一度目にくらべて、二度目には感嘆の度合が少しばかり減じたということ、同様の誠意をもって認めたいと存じます⁽²⁵⁾」と述べるが、ここには弁証論が、しかも巧妙な弁証論が隠されていることがわかる。すぐれた作品なるがゆえに再読しなければならず、再読したがゆえに「無数の問題点に出くわして⁽²⁶⁾」しまう。こうして冒頭からすでに、分裂した自我の対話に耳を傾けさせられて行くのだ。

第一の手紙が始まってまもなく、アンリ二世の宮廷の長い叙述に対して評者は非難するが、その場合も有力なひとつの例証となる。「作品の始まりの部分にある、宮廷のあの長い叙述を読みながら、フランスの歴史を自分は読もうとしているのかと思ひ、題名に見たままぜんぜん出てこない、クレヴの奥方を忘れてしまいました⁽²⁷⁾。」

このようにヴァランクールは非難していながら、しかも非難はできないのである。「こういう欠点（冒頭の宮廷の叙述や、クレヴ夫人の母親による昔の宮廷の物語り

などのディグレーション)を『クレヴの奥方』の作者に、私はとうてい非難する気にはなれません。そういうまわり道は極度に長いわけではなく、もしそれが欠点であるのなら、少なくとも喜びを与えてくれる欠点だといってよいほど、絶えず好ましいものなのです⁽²⁸⁾。」

批評の視点が二つあるいは二つ以上に多元化し、循環する批評、たがいに毒性を中和する批評となっている。批評の礼儀正しさの秘密は、実はそこから発しているといえるのかもしれない。

二元ないし多元的視点をつらぬく単一の批評基準——le vray-semblable (「第一の手紙」についての考察)

このような二元的ないし多元的視点の批評において、それでは批評の基準は揺れうごくのであろうか？ ここではとりあえず「第一の手紙」を対象として考察するが、そこにおいては実にさまざまな、種々雑多ですらある事項が語られているように見えるにもかかわらず、批評の尺度・基準としてはただひとつのものが揺るぎなく存在する。すなわち、「真実らしさ」「ありそうなこと」(le vray-semblable)、「自然らしさ」(le naturel) のたしかな手ざわりによって、この批評書は重みをもつに至っている。

ところでその批評基準 le vray-semblable は、内容的に質的に単純なものであろうか？ それの表われを子細に見て行くと、批評基準に位相のずれがあるのが見いだされた。「慣習的 vray-semblable」, 「心理分析的 vray-semblable」, 「物理的 vray-semblable」の三つが、とりあえず取りあげて私が以下に展開することのできるものである。

慣習的 vray-semblable

アンリ二世の宮廷についての長い叙述のあとで、ようやく『クレヴの奥方』は「小説的に」始まるが、女主人公シャルトルの姫君 (M^{lle} de Chartres) が宮廷に登場した翌日もうすぐに、イタリア人宝石商の店をおとずれる。ここでクレヴ公 (le duc de Clèves) と初めての出会いをするのだから、いずれにしても「イタリア人宝石商の店の場」は小説の発端であるといってよい、重要な設定というべきだろう。ヴァンクールはこの場面の「ほんとうらしくなさ」を非難する。私の見たところでは、この場面への評者の非難は反対意見で中和される度のもっとも少ない、重要例ということができる。ことによると、これは根本的に成立することが不可能な場面だったのかもしれないのだ。

「宝石店でこのできごとできごとに驚かない者はだれもおらないのを、私は見ました⁽²⁹⁾」と書くことによって、読者公衆の意見を代表しているのだという姿勢を見せながら、評者はますます攻撃の手をつよめて行く。習俗や慣習の面から見て、保護者であるところの母親シャルトル夫人の方にも、また娘のシャルトル嬢自身にも、するはずのないことを作者はさせている、ということだろう。「だれをも知らず、だれからも知られていないような場所に⁽³⁰⁾」娘をひとりだけで（もちろんおつきの者は従うが）つかわすことは、母親の側として信じられないような行為であり、いっぽう娘の側では、彼女が十六歳であって、このような年齢でみずから宝石を見立てることはありえず、せいぜいリボンか、そのたぐいの装飾品を選ぶ程度であることを、評者は指摘する。このできごとできごとが「異常で」(extra-ordinaire)、作者が「作りすぎていて」(trop concerté)「空想的でありすぎる」(trop méditée⁽³¹⁾)のは否定できない。

もっと自然なやりかたもあるのを、ヴァランクールは呈示しているが、それは、娘を宮廷に連れてきたのはその母親であるから、当の母親によって彼女を紹介させる方がよいという意見である⁽³²⁾。また、シャルトル嬢とクレーヴ公とをめぐり合わせる必要はあるのだから、たとえば教会の場面でそれをさせたらどうかと、ヴァランクールは案を示している⁽³³⁾。

慣習的な vray-semblable に反している例として、ほかにたとえば、「テミーヌ夫人の手紙事件」をあげることができる。この部分はきわめて筋が錯綜していて、やはりひとつの「ディグレッション」であることは否定できないが、それじたい小説的なおもしろさは持っている。クレーヴ夫人の伯父シャルトル司教管区防衛官 (le vidame de Chartres) が球戯試合のときに手紙を落とすが、これは発信人がテミーヌ夫人 (Madame de Thémynes) であって、他人に拾われては困るたぐいの手紙だった。すなわち王妃が管区防衛官を愛しているのに、彼は王妃からテミーヌ夫人に心移していたからである。この手紙を拾った者が王太子妃に届け、王太子妃はそれを読ませるためにクレーヴ夫人に貸す。しかしこの手紙のことを知った王妃は、落とし主が管区防衛官であるとうわさをきいて異常なほどの関心を示し、なん度も王太子妃のもとに使いを送って、手紙をこちらに渡すよう督促する。いっぽう自分の政治的生命が危うくなることを心配した管区防衛官は、ヌムール公 (le duc de Nemours) に落とし主の身代わりを頼み、引きうけたヌムール公は、手紙を王太子妃からとり返してもらうことをクレーヴ夫人に頼みに行く。ちょうどその手紙をクレーヴ夫人がもっていたので、ふたりは共謀して手紙を隠し、別の手紙を偽造して王太子妃の手を通じ王妃に返した。王妃はそれがにせにせの手紙であることを見破り、後年シャルトルらが標的とな

る陰謀事件の原因を作ることになる。

手紙を最初に手に入れたのはシャトラール (Chstelart) という男で、ヌムール公の衣服のポケットから落ちたものだと言っていた。シャトラールはこの手紙を王太子妃に渡すとき、「恋ぶみ⁽³⁴⁾」だと言っており、すでにそのときまでに内容を知っていた。「大ぜいのひとたちのまえで拾われた手紙、ヌムール公のだといわれた手紙⁽³⁵⁾」を王太子妃のところまで届けに行くほどの男だから、シャトラールというのはそれほど軽率でそそっかしい人間だったというべきだが、ヴァランクールにいわせれば、「それは宮廷で暮らす^すべを知っている男ではなかった⁽³⁶⁾」のだ。

シャトラールの存在そのものが vray-semblable に反するうえに、その場にい合わせたひとたちすべてが、宮廷の習俗・慣習とはかけはなれた行動をしている。手紙が落ち、そして拾われた場所は球戯場の控え室であって、王妃や王太子妃のおつきの貴族たちがつめかけており、選手として出た貴族たちの衣服も置かれてあった。そこへヌムール公とシャルトル管区防衛官のお供の者たちが、主人の衣服をとりきたのだ。そのとき例の手紙がゆかのうえに落ちたが、控え室内にいた者の一部は、それがヌムール公の衣服から落ちたように思い、他の一部は防衛官の衣服から落ちたものと信ずるほかはなかったという状況だった⁽³⁷⁾。

この状況においてヴァランクールは、控え室にいた貴族たちのだれひとりとして、落ちた手紙をヌムールの、あるいはシャルトルの供の者に返そうとせず、その内容を読みあげることに意見一致したことが、ありそうもないことだと指摘する⁽³⁸⁾。またこの手紙のことで少なくともシャルトルが、時間がたって別の場所でみずからその紛失に気づくまで、控え室にいた貴族たちからはもちろんのこと、供の者からすらも報告をされていなかったというすじ書きは、習俗的・慣習的な vray-semblable からあまりにへだたっているというべきだったろう。

心理分析的 vray-semblable

さらに繊細な位相をもつ批評基準・批評尺度として、心理あるいは情念分析的 vray-semblable があるが、その代表的なものはやはり、「イタリア人宝石商の店の場」について見いだされる。ヴァランクールは評者自身に直接口をひらかせず、匿名の知人を登場させる。「あなたもご存じのように、生涯うるわしい感情を熱烈に追いもとめ、やさしい愛情に心を砕いておられる某氏は、そのひと以外にはだれも着目できなかったと思われる、ある個所のなかに、あら探しの種をお見つけになりました⁽³⁹⁾。」

この知人の口を借りたヴァランクールは、作者の大きな誤りとして、「自分がクレヴ公に与えた驚きを見て、シャルトル嬢が赤面した⁽⁴⁰⁾」点を指摘している。こういうことはありうるのか？ この機会に引きつづいて彼女がはげしい恋愛感情を抱くのなら、それはありそうな現象となろう。しかし全くそうではないのだから、控えめに自分を眺め、一語も発しないひとりの男をまえにして、なぜ彼女は赤面しなければならなかったのか？ それではまるで、ひとを見るのに慣れていない純真無垢な田舎娘のようではないか、と評者は疑問を呈する。

シャルトル嬢は作者によれば繊細な感情を識別し、理解できないはずの女性であり、もう少しあとの結婚を目前にした時期に、クレヴ公と彼女が心理分析的ともいえる対話をおこなうとき⁽⁴¹⁾に明らかになる。情熱的に愛する彼に対して、尊敬と感謝という擬似恋愛情念でこたえるにすぎないシャルトル嬢が、他人がふつうに自分を眺めるのとは違った情念をもって、宝石商の店でクレヴ公が自分を眺めたことがなぜ識別・理解できたのかという評者の疑問は、たしかに説得力をもつと私は考える。

またいっぽう、その店で初めて彼女と出会ったクレヴ公の方にも、*vray-semblable* に反する行動があったのは否定できない。あれほど自分を感嘆させた女性を目のまえにしながら、彼は相手にただの一語もいわずに行かせてしまったことを、ヴァランクールは指摘する⁽⁴²⁾。彼女がだれであるかを知る必要はなかったのか、美しさの方はよいとして、知性のよさを見る努力が必要ではなかったのか？ うっとりとしすぎて口が動かなかったとか、相手がそそくさと立ち去ったために取りつくしまがなかったとかなら、その直後に打つ手はあったはずである。宝石商もその名を知らなかったとしても、お供のだれかに彼女のあとをつけさせることもできたはずだと、評者は指摘する⁽⁴³⁾。

ヴァランクールは作者とまったく同時代の人間なのだから、また宮廷生活や貴族の日常生活を熟知していたのだから、言説が正しいかどうかの判断をくだすまえに、まずそれを尊重しつつ謙虚に耳を傾けなければならないが、私の見るところでは評者の説はかなり正しく射ていると思われる。しかしながら一方では、*vray-semblable* と小説のおもしろさとは闘いあうのが必然の運命かもしれないことも、否定しきれないのである。

物理的 *vray-semblable*

さて、私が識別した第三の *vray-semblable* は物理的なものであって、「クロミエの別荘の場」について評者が述べている部分に含まれる。「クロミエの別荘の場」は

正確には二つに分かれ、ひとつは『クレーヴの奥方』の第三部にある、別名「告白の場」であり、他はしいて名づければ「のぞき見の場」というべきものだろう。後者は第四部にはいつている。

「告白の場」とはクレーヴ夫人あるいは夫妻の側に立てばそう名づけられるのであって、もしヌムール公の側に立てば、それは「盗み聞き」あるいは「立ち聞きの場」となってしまう。これは例の「テミーヌ夫人の手紙事件」のさい、クレーヴ夫人とヌムール公とが共謀して王妃の手に渡すべきこの手紙を偽造したあとの場面展開となっているが、クレーヴ夫人ははじめ、手紙がヌムール公あてと思いこんでいたので、われ知らずはげしい嫉妬に胸をこがすが、伯父のシャルトル司教管区防衛官あてであることがわかって、思わずもやさしい態度を相手にとりながら、快活にすらなった。そのことを深く反省した彼女は、クロミエ (Coulommiers) の別荘に引きこもる。いっぽう、クレーヴ夫人への恋に希望を見いだしたヌムール公は、その後彼女に会えないことを悲しみ、なんとか会うことはできないかと考えて、クロミエの近くにやはり別荘をもって住む妹のメルクール夫人 (Madame de Mercœur) を防衛官とともにおとずれ、自然な形でクレーヴ夫人を訪問できる機会を待った。

メルクール夫人はおとずれてきたふたりを喜ばせようと、鹿狩りにみなで出かけたところ、ヌムール公は森のなかでひとりになって迷ってしまう。わざと迷ったのだといわれてもしかたのない迷いかただが、村びとに帰り道をたずねると現在地がクロミエの近くだということがわかり、矢もたてもたまらずその方向に馬を駆けさせたのだ。

「クロミエの森につくと、りっぱに作られた道に沿ってかまわず進んだが、きっとこれは城館に通ずる道にちがいないと判断したからだった。その道の果てにひと棟の別館があった⁽⁴⁴⁾」が、ヴァランクールは知人の女性の言として、この別館 (pavilion) について、「私はこれの建築構造を検討しようにも、検討できません。というのは、それが理解できないからです⁽⁴⁵⁾」と述べている。原作によって説明されている範囲から考えると、その別館の階下は大きな広間が占め、それに二つの小室が付属している。小室のひとつは花園にのぞんでいて、その花園と森とのあいだには生け垣だけが柵の役目をしている。第二の小室は庭園の広い遊歩道に面している⁽⁴⁶⁾。ヌムール公はまず別館のなかに足を踏み入れるが、思いがけず庭の道を歩いてくるクレーヴ公夫妻やその従者たちを見て、とっさに隠れる気になる。彼は花園に向いた小室には入り、森に通ずる入り口から出て行くつもりだった。ところでヌムール公がはいってきたのはどこからか、それが問題ではないかと私は考える。おそらく庭園の道に面した小室の入り口からだと思われるが、作者も評者もそれに触れてはいないので、私も

こだわらないようにしたい。

ヴァランクールを理解するところでは、二つの小室はたがいに開かれているのに、この小室のひとつに隠れてだれからも見られることなく、広間での例のクレーヴ夫人が夫にする「告白」を聞くことができるということが、不思議でならない⁽⁴⁷⁾のだ。またそれを許すとしても、クレーヴ公夫妻が休息したのちに森のなかを散歩しようという気になったら、どうなることだろう⁽⁴⁸⁾か？ 気持ちがいらぬ知らず、こんな場所にじっと隠れていられるのか？ ヌムール公は乗馬用の深靴 (bottes) を着用している。緊急の場合、乗馬靴のままこの小室をよこぎり、姿も見られずに花園を越えて逃げるなどということが期待できるのだろうか⁽⁴⁹⁾？

建物の建築構造に関連して、ヌムール公の行動がいかにも vray-semblable に反するかの評者の力説は、私たちを納得させるものをもっている。万一の場合クレーヴ夫人をたいへんな危険にさらしてしまうそんな行動をとらなくても、ヌムール公とクレーヴ公とは親しい間柄であるゆえに、たがいの家に自由な行き来はできたはずだから、もっと自然な機会はあったのではないか⁽⁵⁰⁾？

クロミエに関しては、まだ物理的な vray-semblable の問題がある。アンリ二世の急死ののち、新王フランソワ二世の即位式がランス (Reims) でとどこおりなく終了してから、宮廷の貴族たちが新しい離宮シャンポール (Chambord) へ行ったさい、ヌムール公が急に旅に出るという形でひそかにクロミエに行くが、そこには夫から疑惑を受けて引きこもっているクレーヴ夫人がいる。

夜になって忍びこんだヌムール公は、クレーヴ夫人がひそかに自分の描かれた絵を眺めたり、以前自分の所有だった杖に、騎上槍試合のとき身に帯びたのと同じ色のリボン巻きつけたりしている姿を、「のぞき見る」のだが、この別荘の庭に侵入するまでに物理的に大へんな苦勞をする。「生け垣は非常に高く、ひとがめぐりこめないように、その背後にもまた生け垣が張りめぐらされていた⁽⁵¹⁾」のだったから。ここで評者は強烈な疑問を呈する。道に迷った形で第一回目にクロミエまで導かれてきたときには、「彼は乗馬靴をはいていたのに、またその場所についてなんの知識もなかったのに、庭が目にはいるとすぐ、難なく生け垣を越えてしまったのです⁽⁵²⁾」と。第一回目のときは名ばかりの生け垣だったのに、第二回目になると防御柵ともいべき生け垣が、しかも二重になっているのだ。物理的な「真実らしくなさ」はここで頂点に達しているといっても言いすぎではあるまい。

小説論的 vray-semblable
 (「第一の手紙」についての考察)

さらにまた、批評基準 vray-semblable の第四種として列挙してもよいが、次元の少しばかり異なるものが見わけられる。それは「第一の手紙」の後尾四分の一以上を占める異質の部分から主として成り立つもので、そこでは「私」とある博識のひととが、むしろ白熱した対話をくりひろげる。そこでは「歴史」と「小説」とのかかわりについての、当時の教養人士たちの関心と意見とが、いわゆる「規則」(règles)の問題とからんで聞かされる。

この部分の先駆として、対話ではなく評者が直接に語る形で、アンリ二世の急死の原因となる、あの有名な「騎上槍試合の場」が材料とされた個所がある。このときの四人の主戦者のうち、国王は白と黒の色を身に帯び、ギュイズ公は緋色と白、フェララ公は黄と赤、ヌムール公は黄と黒を身に帯びて試合にのぞんだ⁽⁵³⁾のだったが、これはまったく歴史と一致している。

評者にいわせれば、これほど明白な歴史的事実を呈示している以上、ヌムール公の色彩だけは実際と違う色にすべきだったのだ。歴史上のヌムール公は、プラトニックにでもなく、世人に対して沈黙を守ったままでもなしに、ある貴婦人に対する気持ちを黄と黒の色で示したのだから⁽⁵⁴⁾。それではクレーヴ公の死にのぞんでの悲しみが、根拠のないものではないことになり、物語りの根幹が揺らいでしまう。評者によれば、「不快な観念を与える可能性のある事項は、つねに避ける必要があると思われ、私の意見ではその自由(歴史的事実を変更する作家の自由)を行使しなければならないのは、まさにこの個所⁽⁵⁵⁾」なのであった。

この考えかたは、後尾の対話の部分で「私」の意見として踏襲されている。歴史としての vray-semblable は同時に小説作法としての vray-semblable であり、博識の某氏は歴史的事実と規則の擁護者となるのに対して、「私」は作者の創意と読者に与える喜びの方をむしろ大切にしようとする。

某氏は『クレーヴの奥方』については、アンリ二世の宮廷に、架空の人物であるシャルトル姫や結婚を経験したクレーヴ公が存在するのに驚き、フィクションの乱用は許されないことを強調するのに対し、「私」は、この作品では読者を不快にさせるほどの欠陥的フィクションは存在しないと反論する。そして叙事詩の規則に従って『クレーヴの奥方』を検証するのはあまりに厳格でありすぎ、学者的でありすぎるとつけ加える⁽⁵⁶⁾。

学をひけらかしながら某氏に展開させるフィクション論は、私には非常に興味がふかい。いまそれをできるだけ簡略に示せば、以下になるであろう。——フィクションには二種類が存在する。第一のものは想像力に従うことが作者に許されているもので、起こる可能性、すなわち真実らしきがあればよく、古・現代の喜劇、ボッカチオの中・短編がそれに当たる。この場合は、人物は無名、行為・事件は未知のものでなければならない。第二のものは、真実がまじっていて、物語りを美しく快いものにするために作者による創出があるもので、悲劇、叙事詩、最近書かれるようになった『グラン・シリユス』(*le Grand Cyrus*) のような歴史の外見をもつ大小説がその例となる。この場合、創出は細部にかぎられ、歴史の主要なできごととは変えることができないという条件がつく⁽⁵⁷⁾。

さらに某氏は、フィクションが歴史の真正な事実に対して正当で必然的な関係を持ち、それらの事実は逆にフィクションに対して自然に従属する印象を与えるようにすれば、まさにひとつの秘史と見えるまでになり、その作りの性をだれにも証明できなくなると述べつつ、大事件でありながら、細部の記録が残っていないものを選ぶこと、読者の側からすればたとえ喜劇や小説の場合でも、作者が尊敬心をもって、また感じとれないほどの用心ぶかさもってだましてくれるのを望んでいるのだから、その気持ちによくこたえること⁽⁵⁸⁾——などを強調する。それに対して「私」の方は、ウェルギリウス (Virgile) でさえ重大な歴史的事実を変更したのに、『クレヴの奥方』の作者にそれほどの規則を守らせるのは酷であること、「規則」より読者に与える「喜び」(plaisir) の方を高く評価すべきであること⁽⁵⁹⁾を述べて反論する。

白熱しているこの対話では、「私」より某氏の議論の方が理路整然としていて優勢であり、「私」の方が守勢に立っているように見える。歴史すなわち小説論的 vray-semblable を通しての『クレヴの奥方』批評は、「辛らつさ」や「皮肉み」が二元性のなかで最大に希薄となり、むしろ小説論の展開に重心が移る結果となった、といえるのではあるまいか。(未完)

注

1. 2. に示した書の pp. 214-216 にこの指摘はあるが、糺弾的な調子は感じとれない。対話の形をとって、一方にそれをいわせているのも、調子をやわらげる一因であったろう。ここに最重要と思われる箇所を原文で引用しておこう。

……Il se trouva-là une personne de qualité, qui a infiniment d'esprit & de délicatesse, qui recommença à condamner tout ce que l'on avoit déjà condamné, & qui nous dit en riant, que Monsieur de Cleves avoit bien éloigné de témoigner autant de courage & de

douceur que le Marquis de Thermes en avoit fait voir dans une aventure toute pareille. Quel Marquis de Thermes voulez-vous dire, interrompis-je, & de quelle aventure entendez-vous parler? Se trouve-t-il souvent des femmes qui fassent à leurs maris des confidences de cette nature? En avoit-on jamais ouï parler avant la Princesse de Cleves? J'avois crû que cette aventure estoit originale, & l'on m'avoit dit que l'Auteur de cette histoire se donnoit la gloire de l'invention. Je ne sçai point tout cela, me dit-il; mais je sçay bien que dans le second tome d'un certain livre que l'on appelle, si je ne me trompe, *les Desordres de l'amour*, on trouve une histoire qui a quelque rapport avec celle-cy. On y voit le Marquis de Thermes amoureux de sa propre femme; on voit cette femme répondre aux empressemens de son mari avec beaucoup de froideur & d'insensibilité, chercher la solitude, fuir le grand monde, & enfin devenir malade de chagrin....

2. LETTRES/A MADAME/LA MARQUISE***/SUR LE SUJET/DE LA/PRINCESSE/DE CLEVES

A PARIS,/Chez SEBASTIEN MARBRE-CRAMOISY,/Imprimeur du Roy, ruë S. Jacques,/aux Cicognes.

M. DC. LXXVIII/Avec Privilege de sa Majesté.

3. Albert Thibaudet: *Physiologie de la Critique*, Librairie Nizet, 1962; p. 20 et sq.
4. *Lettres*…… が書簡体であることは、critique parlé にあまりによく適合している。
5. Valincour: *Lettres à Madame la Marquise*** sur le sujet de la Princesse de Clèves*, Introduction et notes d'Albert Cazes, Éditions Bossard, 1925, Introduction p. 13, 《subtiles》《pénétrantes》《ironique》。
6. *Ibid.*, Introduction de Cazes, p 3, ……l'homme instruit 《et qui sait vivre》,……
7. 1681年、やはり同じ書店 Marbre-Cramoisy から出版。174ページの分量で、後年 Fontenelle の賛辞のなかでこの作品のことも触れられている。できのよい、一種のささやかな歴史書である (*Catalogue générale des Livres imprimés de la Bibliothèque nationale* の Valincour の項, その他参照)。
8. Introduction de Cazes, p. 33 et sq.
9. *Ibid.*, p. 14.
10. *Ibid.*, p. 45.
11. Henri Coulet: *Le Roman jusqu'à la Révolution*, Tome I: Histoire du Roman en France, Seconde Édition Revue, Librairie Arman Colin, 1967, p. 214.
12. M^{me} de Lafayette: *Romans et Nouvelles*, Éditions Garnier Frères, 1961, p. 421 (Notes). 四分冊でつぎつぎに発行された。
13. Jean de Bazin: *Lettres de Madame de La Fayette au Chevalier de Leschervaine*, Texte provenant des Archives du Turin, Librairie Nizet, 1970. André Beaunier も同様の推定をおこなっている。
14. *Lettres*……, 最終ページ。《Registré sur le Livre de la Commuauté des Imprimeurs & Libraires de Paris le 30 Juin 1678……》
15. 16. Introductions de Cazes, pp. 29-32.

17. *Ibid.*, p. 35.

18. CONVERSATIONS/SUR LA/CRITIQUE/DE LA/PRINCESSE/DE/CLEVES.

A PARIS, /Chez CLAUDE BARBIN, au Palais, /sur le second Perron de la Sainte Chapelle,

M. DC. LXXIX, /AVEC PRIVILEGE DV ROY.

19. *Ibid.*, TABLE と本文の最初とのあいだにはきまれた二ページ。

20. *Lettres*……, pp. 4-5, 《trois choses》……《la conduite en général》《la maniere dont tous les évenemens sont amenez》——《les sentimens que l'on donne aux personnages qui y ont la principale part》——《le stile de l'Historien》《les façons de parler dont il se sert》。

21. *Conversations*……, p. 13, p. 151, p. 267, 《II. CONVERSATION De la Conduite.》《III. CONVERSATION Des Sentimens.》《IV. CONVERSATION Du langage & du Stile.》なお、《I. CONVERSATION》が「序」の意味をもってそのまえにあるが、さらに《PRE-FACE》が30ページにわたって本の最初の部分に展開されている。

22. Maurice Laugaa: *Lectures de M^{me} de Lafayette*, Librairie Armand Colin, 1971; p. 55.

23. *Ibid.*, p. 59.

24. *Lettres*……, p. 3, 《avec toute avidité & toute l'attention possible》。

25. *Ibid.*

26. *Ibid.*, p. 4, 《J'y ay trouvé mille difficultez en la relisant……》。

27. *Ibid.*, p. 6.

28. *Ibid.*, p. 22.

29. *Ibid.*, p. 8.

30. *Ibid.*

31. *Ibid.*, p. 10.

32. *Ibid.*, p. 7.

33. *Ibid.*, p. 10.

34. *Romans et Nouvelles*, op. cit., p. 305, 《une lettre de galanterie》。

35. *Lettres*……, p. 28.

36. *Ibid.*

37. *Romans et Nouvelles*, p. 322.

38. *Lettres*……, pp. 30-31.

39. 40. *Ibid.*, pp. 10-11.

41. *Romans et Nouvelles*, pp. 256-259.

42. 43. *Lettres*……, pp. 12-14.

44. *Romans et Nouvelles*, pp. 331-332.

45. *Lettres*……, p. 42.

46. *Romans et Nouvelles*, p. 332.

47. 48. 49. *Lettres*……, pp. 42-44.

50. *Ibid.*, pp. 46-48.

- 51 *Romans et Nouvelles*, p. 366.
52. *Lettres*……, pp. 66-67.
53. *Romans et Nouvelles*, p. 355.
54. *Lettres*……, pp. 57-59.
55. *Ibid.*, pp. 59-60.
56. *Ibid.*, pp. 87-92.
57. *Ibid.*, pp. 93-98.
58. *Ibid.*, pp. 99-115.
59. *Ibid.*, pp. 111-119.